



地域の底力——岩手県久慈市

苦難を乗り越え 地道な努力を重ねながら 未来を切り拓く岩手県久慈市

何もないと思っていた自分たちの住むまちに、
都会では見ることのできない宝物がある。
東日本大震災や大規模な水害を経た今、
岩手県久慈市はあらためて地元の魅力を発見し、
不屈の精神で前進をはかる。



取材・文 山内史子
写真 野瀬勝一

久慈駅と大船渡市盛駅を結ぶ、第三セクター三陸鉄道の「リアス線」。2011年の東日本大震災で大きな被害を受けたが、2014年に全線復旧。2019年3月には、JR東日本管轄となっていた宮古駅～釜石駅間の経営が移管され、新たなスタートをきった。



三陸復興国立公園小袖海岸の奇岩「釣り鐘の岩」。かつて洞穴に、釣り鐘のような形の岩がぶらさがっていたことから名付けられた。

久慈の人々に自信を与えた「あまちゃん」の放送

岩手県北東部、人口約三万五〇〇〇人の久慈市は太平洋に面し、約八五%を森林が占める。そのため、美しい海岸が続く三陸復興国立公園や、日本一ともいわれる白樺林が広がる久慈平庭県立自然公園といった豊かな自然資産に恵まれている。二〇一一年の東日本大震災では、市内約九〇〇軒が全半壊するなど大きな被害を受けた。それに追い打ちをかけるように、二〇一六年には台風の影響により、市街地を含めた広

い地域が水害にみまわれた。

しかし、二〇一九年三月には、JR東日本管轄となっていた宮古駅（釜石駅間が復旧し、復興の象徴の一つ「三陸鉄道」に経営移管。「三陸鉄道リアス線」（久慈駅〜盛岡駅）として全線開通し、新たなスタートをきった。こうしたインフラが回復し、日常の生活は確実に戻りつつあると話すのは、久慈市で生まれ育ったという市長の遠藤謙一氏だ。「私が子どもの頃、久慈にはお店もたくさんあってにぎわっていたんです。ただ少子高齢化の波もあって徐々にそのにぎわいが失われて



久慈市南西部に広がる久慈平庭県立自然公園は約三一万本の白樺林が約四・五キロにわたって続き、林間をぬってのウォーキングやスノーシュートレッキングが行われる。

「財政が非常に厳しいため、市民すべての声に行政が応えることは難しい。まちを元気にするために何が出来るか一緒に考え、進めていきたいと思います」と話す市長の遠藤謙一氏。



いきました。そこに東日本大震災、台風による水害。これは久慈市にとって本当につらい経験でした」
全国各地の例にもれず、人口減少・高齢化への対応は大きな課題のひとつだと遠藤氏は言う。「少子高齢化と人口の減少というこの大きな流れは、一自治体の力では到底止められません。そうした状況を前提にしつつも、若い世代が久慈で仕事に就き、家庭を持って子育てができるようにする。人口減少による地域への影響をなるべく減らすために、今やれることをやっていきたい」
対策として遠藤氏が打ち出したのが、中学生、高校生たちに地元企業に就職したいという意識をもってもらったための取り組みだ。「地元で仕事がなく出稼ぎが当たり前だった時代が長かったんです。

このため、久慈で多くの求人があるにもかかわらず、知らない方が多い。地元企業の魅力と人手不足の現状を、子どもたちに知って欲しいと思いました」
企業側も学校へ出向いて説明するなどの努力が重ねられた結果、三割未満だった高卒の地元就職率は五割まで高まったという。「高校の先生方も意識が変わり、積極的に地元就職を勧めていただいています。最終的には七割まで上げていきたいですね。また、これまで大卒者の採用を想定していなかった企業には、将来を見据え、会社の幹部候補としての求人を考えて欲しいと話しています」
久慈といえは多くの方が思い出すのは、二〇一三年に放送されたNHK連続テレビ小説「あまちゃん」だろう。年間五〇万〜八〇万人だった



三陸鉄道リアス線は通学する生徒たちを含め、久慈市民にとって欠かせない足。三陸鉄道久慈駅は、「あまちゃん」の北三陸駅のロケに使われた。駅構内で販売されている1日20食限定の「ウニ弁当」もまた、ドラマに登場して観光客の注目の的。



観光客は、放送時には約一―三万人を数えた。その後、東南アジア等一〇カ国以上においても放映されたことから、今でも台湾ほか海外から多くのファンが訪れるという。その影響は交流人口だけではないと、遠藤氏の顔がほころぶ。

「久慈は遠い、寒い、何にもないというのが、地元のお年寄りの口癖だったんです。それが『あまちゃん』をきっかけに、久慈に来てくださった方から『こんなにいいまちはない』と言われて自分たちのまちに自信を持ち、前向きに思う人が増えまし



2014年にオープンした「あまちゃんハウス」では、ドラマの衣装やジオラマなどの小道具を展示。全国からファンが訪れる“聖地”のひとつになっている。

観光客がエールを送る 歴史ある海女の活動

た。まちに人を呼ぶには、まず住んでいる人がまちを誇らしく思うことが大事。久慈への誇りを持つ人が増えたのは、経済的な効果以上に大きなことだったと思っています」

「あまちゃん」で一躍脚光を浴びた久慈の観光資源が、明治初頭から続く北限の海女だ。現役の海女である中川やえ子氏、欠畑かけはたきわ子氏によれば、最盛期には一〇〇人以上の海女がいたものの、現在は一〇―二〇人程度だという。

拠点となる小袖海女センターは、震災後の二〇一五年春に復旧された建物。以前の海女センターは二〇一〇年に新築してから約七

カ月後に基礎部分だけを残して津波に流され、海に潜る際の衣装や展示していた昔の道具類など貴重な品々も失われた。そのため、震災後に行われた海女の総会では、活動休止の声もあがったと中川氏は話す。

「二度活動をやめてしまうと、状況が変わって再開となっても、手をあげる人はいなくなり、途絶えてしまうと思っただけです」

観光客の声にも後押しされ、自らが率先してふたたび海に潜ったときの記憶を中川氏は振り返る。

「津波のことが胸にあり、何が起るかわからないという怖さから、最初の一步がなかなか踏み出せなかった。震災後の海はすっかり変わり果て、海に入ったあとは、手ぬぐいも足袋も顔もへドロで

真っ黒になりました」

欠畑氏が続ける。

「最初に入った中川さんたちの勇気には頭が下がります。私が震災後に初めて潜ったときも、同じように怖さを覚えました。海のながかシーンとしている感じです。以前は海藻やウニでにぎやかだったのが、何もない。地形もすっかり変わっていました」

その後、周囲の支援を受けて体制が整えられ、「あまちゃん」効果により観光客は一気に増えた。昼食を食べる暇もなかったと語りながら、中川氏は笑顔になった。

「私たちが海に潜るのを見て、拍手や応援してくれる気持ちがありがたかったですね。見に来てくださる方がいたからこそ今の自分たちがあるんです」

「久慈地下水族科学館もぐらびあ」は、地下石油備蓄基地の作業用トンネルを活用した日本初の地下水族館。北限の海女の素潜りや、潜水服を着る「南部もぐり」のショーが水中で行われる。



小袖海岸では、地元でとれた新鮮なホタテの貝焼きも観光客の人気を集めている。



上／北限の海女として海に潜る、中川やえ子氏(左)と欠畑さわ子氏。素潜りの実演が行われるのは、毎年7～9月。下／2015年に再建された「小袖海女センター」。海女の歴史等の展示コーナーに加え、特産品を販売するショップや、生ウニ井などが食べられる喫茶スペースもある。



欠畑氏も冗談めかして語る。

「芸能人の気分がわかりましたよ。海面に上がったときの声援で、元気をもらいました。お客さまの喜びが、自分たちの喜びになったんです。これはかけがえのない経験でした」

後継者不足の問題を抱えるなか、二〇一八年には久しぶりに地元が、若手が海女デビューしたという明るい話題にもうれしさがこみあげた。

縫製業を支える 久慈の人々の堅実な気質

久慈を含む北岩手の主要産業の代表格が、縫製業。そのひとつ、高級婦人服を手がける「岩手モリ

ヤ」はもともと東京の企業だった

が、一九七四年に久慈工場を設けた後、一九八八年に現地法人化する。社名の「岩手」には地元で根付きたいとの思いを込めた。話すのは、代表取締役社長の森奥信孝氏だ。設立を決めた大きな理由は、久慈の人の気質だという。

「東京では住み込みで働く東北出身の女性社員が多かったのですが、なかでも久慈の人たちは優秀でした。何事に対しても真面目で、責任感が強く、作業は緻密。とはいえ、技術を積んでも、多くの人は結婚などで地元に戻り辞めていく。これはもったいないと思っていました」

久慈で順調に業績を上げていた

ものの、震災により困難にみまわれた。森奥氏や社員はしばらく避難所生活を強いられたが、幸いにして全員無事。工場も津波が玄關先まで浸水を逃れて一週間で操業を再開したにもかかわらず、全国的な買い控えの影響で受注が激減した。その頃について、森奥氏はこう振り返る。

「この逆境をなんとか将来につなげるようにしたいと考え、一カ月以上仕事がない分、雇用調整助成金(注1)を活用し、社員の教育訓練を行い技術向上を図りました。また、水や電気が止まった経験から、省エネルギーの徹底にも取り組みました。水道光熱費は全社員一丸となり震災前に比べ五二%削減することができました」

日本の縫製業界が現在、海外での安価な生産におされて苦戦する一方で、岩手モリヤの取引先は名だたるブランドばかり。信頼の理由は、確かな技術力だ。

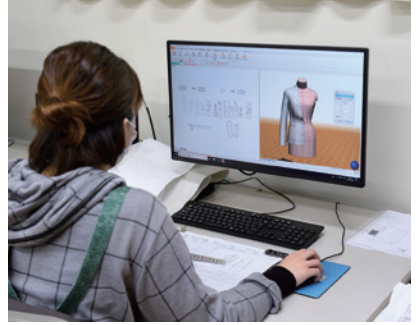


岩手モリヤ代表取締役社長の森奥信孝氏は一般社団法人北いわてアパレル産業振興会の代表理事も務め、学生によるファッションショーを支援するなど、未来の人材育成にも力を注ぐ。

(注1)雇用調整助成金／景気の変動などで事業縮小等を余儀なくされた事業主に対し、従業員を解雇せず、一時的に休業させたり、教育訓練を受けさせたりした場合などに国が休業手当や賃金などの一部を助成する制度。

「発注元からの縫製依頼書をそのまま反映するのではなく、縫製やアイロンがけなどの工程で独自の工夫を加えて立体感を出し、より付加価値を高めて仕上げるんです。生産性は下がるものの、他社との差別化が図れます。メイド・イン・ジャパンとして誇れる商品です」

約一〇〇名の従業員のほとんどが地元採用で、九割が女性。賃金はおさえられても三年で帰国してしまう外国人研修生や実習生には頼らない。



岩手モリヤの工場では、服のパターン作成のための3D CAD（立体的な形状を作っていく支援ツール）から縫製機器まで最新技術を導入し、作業の効率化と安定した品質確保を目指す。



「久慈の人であれば、結婚、出産、子育てをしながらでも、末永く働いてもらえます。技術者を育てる必要がある製造業の場合は、それが大きなメリットです。高品質な商品を生む、まさしく『人材』なんです」

健やかに育つ短角牛の 美味なる魅力を 広めるために

久慈の第一次産業では、農業漁業に加え、畜産業が昔から盛んに行われてきた。なかでも注目したいのは、二〇〇六年に久慈市と合併した旧山形村（現・久慈市山形町）で飼育される短角牛（日本短角種）だ。

その加工を担う「総合農舎山形村」は、東京の大手自然派食品宅配企業、久慈市、さらには新岩手農業協同組合（JA新いわて）が出資し、一九九四年に設立された」と語るのは、取締役・所長の川村周^{しゅう}氏だ。うま味調味料や保存料を使わず、「安心でおいしい」というコンセプトのもと、短角牛を使ったハンバーグやパスタソース、カレーなどの加工食品の製造販売を手掛ける。

JA新いわて久慈営農経済センターの泉山祐介氏は、三者の連携の実情をこう語る。

「総合農舎山形村は、生産者から短角牛を一頭買いで仕入れて加工を行う。その仲介役となるのが、JAです」

すなわち、JAを介した六次産業化（注②）だ。生産者のひとり、JA新いわてくじ短角牛肥育部会長の中屋敷稔^{のぶ}氏は、山形町の短角牛についてこう説明する。

「夏山冬里……山形町の短角牛は、夏は広大な牧草地に放牧され、自然交配を経て冬に牛舎に帰ってくる。放牧地は起伏の激しい山間にありますから、牛は足腰が鍛

えられ、引き締まった肉質になるんです」

牧草は無農薬で、肥育時は国産一〇〇%の飼料が使われる。山形町の短角牛は徹底して健やかに育てられると、川村氏が続ける。

「短角牛はサシが入らない赤身肉で、かみしめておいしさが立つ。さらには健康に育った牛なので、脂身の旨みもやさしいんです」

実際、ハンバーグやパスタソースは、思わず笑みがこぼれる旨さだった。若い頃は牧場の跡を継ぐつもりがなかったという中屋敷氏が短角牛に関わることを決めたのも、その旨さゆえのこと。

「久慈をいったん離れ、あらためて食べたときに素直に『おいしい

（注②）六次産業化／農林水産物を収穫・漁獲（第一次産業）するだけでなく、加工（第二次産業）し、流通・販売（第三次産業）までを総合的に手がけ、農山漁村の豊かな地域資源を活用した新たな付加価値を生み出す取り組み。

い』と感じました。にもかかわらず後継者や短角牛の数が大きく減少した様子を目の当たりにし、何とかしなければと思ったんです。短角牛のおいしさを知ってもらえれば、まだ十分チャンスはあると思っています」

中屋敷氏をはじめ四〇代の生産者は四名。一三軒ある牧場の多くは跡継ぎがない。また、首都圏をはじめ短角牛や赤身肉の人気・需要は確実に高まっているが、知名度や市場価格は黒毛和牛や霜降

左から総合農舎山形村の取締役・所長の川村周氏、JA新いわてくじ短角牛肥育部会長の中屋敷稔氏、JA新いわて久慈営農経済センターの泉山祐介氏。加工を担う人々、生産者、JAがひとつになり、短角牛の未来を拓こうとしている。下／自然のなかでのびのびと育つ山形町の短角牛。



総合農舎山形村の製造は、ほぼ手作りに近い工程。左／短角牛のシチューやカレーなどのレトルト食品は久慈駅や街中の「道の駅くじやませ土風館」などで販売されているほか、インターネットの通販販売にも対応。



り肉に及ばない。こうした現状を踏まえつつ、川村氏は未来を見据える。

「総合農舎山形村の加工スタッフも高齢化が進むなか、次の世代に短角牛の取り組みをどうつなげるかが私たちの課題です。短角牛はもともと希少ですし、無理に安売りしても続かない。自分たちの足を使って、細くとも長くつきあってくださる消費者を見つけ、ブランド力、認知度を少しずつ上げていこうと考えています。それと並行して、畜産関連業が採算のとれる仕事であることを若い世代に見せていくこともわれわれの大事な使命です」

J Aの泉山氏も厳しい現実を理解しつつ、前向きにとらえる。

「短角牛をめぐる基盤は決して盤石ではありません。ただ、食への関心が高まっている中、伸び伸

びと健やかに育てる私たちの取り組みを知ってもらえれば、消費者に受け入れられ、ひいては生産数の増加につながる事ができると思っています。久慈では短角牛による闘牛も開催されているので、それも情報発信に活用したい。結果的に、地道で多様な活動が、新規就業者のなり手を増やすことにつながると期待しています」

短角牛のPRのため、関係者は市内で開催されるイベントにも積極的に参加。また、商品のパッケージには短角牛が健やかに育つ環境が丁寧につづられており、それにひかれて山形町へと訪れる消費者もいるそうだ。

実際に豊かな緑が広がる牧場を訪れた際には、のんびり草を食む牛たちのやさしい顔つきと脚のたくましさに魅了された。帰り際、「この景色をなくしたくないんです」とつぶやいた中屋敷氏の言葉もまた、深く胸に刻まれた。

豊かな自然を活用する グリーンツーリズム

久慈市内の各所で受け継がれて

きた自然の恵みを活かした取り組みが、官民が協力して行うグリーンツーリズムだ。久慈市観光交流課交流推進係長の中村武志氏たけしによれば、その発端は山形村短角牛の故郷である旧山形村だという。

「旧山形村では早くから高齢化や人口減少が懸念されていました。それに対応すべく、当時の村長が交流人口拡大と地域活性化のため、まちの資源を活かした取り組みとして始めたのがグリーンツーリズムなんです」

二〇〇五年度から本格的にスタートしたその内容は、小中学生を対象にして山の溪流を逆行しながら進むシャワークライミング、ロープで木登りをするラインクラ

イミングといった自然体験、畜産や農業、林業などの産業体験と多岐にわたる。さらには久慈市との合併により、漁業や琥珀採掘こまゆも加わり、二〇一八年度は首都圏の学校による教育旅行をはじめ延べ約五〇〇〇人が参加し



ている。このツーリズムの片翼を担う民間団体「岩手県久慈市ふるさと体験学習協会」の菊池一弘氏かずひろがその魅力を語る。「本物を体験してもらおう、というのがわれわれの一貫したテーマ。たとえば久慈の特産品であるほう

上／ほうれん草の出荷を手伝う農業体験。子どもたちの表情は真剣だ。左上／ヘルスツーリズムのプログラムには、樹齢700年ほどのけやきが見守る神社で行うヨガも含まれる。左／グリーンツーリズムの体験プログラムのひとつ「シャワークライミング」。川の流れに逆らい、大小の滝を登り上流を目指す。

(写真提供：久慈市)



琥珀採掘現場跡に建つ「久慈琥珀博物館」では、昆虫の化石が入った琥珀を展示。採掘体験場ではティラノサウルスほか恐竜の化石も多数見つかっており、未来の観光資源として期待がかかる。



久慈市交流推進係長の中村武志氏(右)とふるさと体験学習協会の菊池一弘氏。官民の連携により、市民を巻き込んだグリーンツーリズムやヘルスツーリズムに取り組む。「地元の人が自分たちのまちを好きになって初めて、地域づくりは進んでいくのだと思います」と中村氏は話す。



れん草の農家では、実際に販売されるものの収穫を手伝ってもらっているので、現場での丁寧な仕事を体験できるんです」

「こころの体験」と銘打たれた教育旅行は民泊も含まれるが、そこには予想外の効果があったと中村氏は話す。

「緑や川、星空がきれい、ご飯

がおいしい、という子どもたちの声を聞き、久慈に住むわれわれが当たり前だと思っていたものに価値があると、民泊を受け入れた地元の方たちが気づいたんです。これは大きかったですね。地元の良いさを都会の人が教えてくれた。グリーンツーリズムを担うのは私たち市の役割ですが、地元の方に対しては、久慈の良さを再認識してもらい一つ、自らが地域づくりに貢献するという意識を持ってもらうことが大事だと思います」

菊池氏が解説してくれた、「学校の森づくり体験」も興味深い。

「学校単位で山を丸ごと貸し出し、達人と相談しながら時間をかけて自分たちの森を育むという企画で、現在三校が取り組んでいます。木を守るだけではなく、伐採も必要な森のしくみを体験してもらおう。さらには間伐した木を使い、ベンチや花壇づくり、シイタケの植菌なども行っています」

より裾野を広げるために現在、準備が進められているのが、女性を中心に大人を対象としたヘルスツーリズムだ。地元の飲食店の協力を得たヘルシーメニューも考案

された。中村氏によれば、この取り組みは市民の意識改革も視野に入れていくという。

「市民向けとして、健康づくりの意識を高めるツアーを催行しています。ガイドが指導する健康に効果的な歩き方を学んだり、塩分が控えめの食事の良さを認識したり、プログラムを介して毎日の生活を少しでも改善してもらうのが目的です」

観光事業としてのツアーは、二〇二〇年から本格的に始まる。健康を意識して久慈を訪れる人々にもたらすことになるだろう。

広域連携を確実にする 復興道路への期待

未来へとつながる希望の種は、まだまだある。市長の遠藤氏によれば復興道路の一環として、二〇二〇年度末には仙台市と八戸市を結ぶ三陸沿岸道路(無料高速道路)が開通するという。

「交流人口を増やすためには、久慈市や岩手県という発想ではなく、隣接する宮城県や青森県、秋

田県も含めて広域で考えなければなりません。この道路がつながれば、より広く連携が生まれるはずですよ」

その開通をふまえ、大型の工場建設も予定されている。また、久慈市ほか岩手県、青森県、福島県の一二市町村が連携して電力を横浜市に提供する再生可能エネルギー事業も進行中だ。「あまちゃん」に続くロケ地誘致も積極的に行われ、二〇二〇年には多くの久慈市民がエキストラとして関わった映画『星屑の町』が公開される。

多方面でまかれた種は、岩手モリヤの森奥氏が魅せられた何事にも真摯に取り組む久慈の人々の気質と相まって、ゆつくりと、しかし着実に芽吹くことだろう。

上空から見た、短角牛の放牧風景。この広い牧草地で牛たちは自由に、ストレスなく夏場を過ごす。

